



生き物を感じる S L

小 松 守

(秋田市大森山動物園 園長)

S Lはどこか生き物を感じさせる不思議な乗物だ。

10月12日、J R男鹿線、秋田・男鹿間で47年ぶりにS Lが走った。J R東日本秋田支社と秋田県の粋な観光キャンペーン企画、C 6 1 型S Lの愛称は「S Lおが」だった。

Steam Locomotionの略語がS L、石炭を燃やし、水を蒸気エネルギーに変え、黒煙を上げ、白い蒸気を吐き出しながら走る蒸気機関車だ。独特の汽笛は郷愁と同時になぜか哀愁のようなものさえも感じさせる。

秋晴れの日、運行前の試乗会に招かれ、60年近く前にタイムスリップし、子ども時代を思い出していた。からだで覚えていたS L体験が蘇る気がしてワクワクした。妙に生き物を感じさせるS Lの魅力に引き寄せられる自分がいることも分かった。

S Lの汽笛は哀愁感を漂わせるだけではなく、重い列車を曳いて「さあ行くぞ」という力を込めた出発宣言というか、ある種の覚悟のようにも聞こえてくる。今様の電車が発する乾いたデジタル世界の音質と違って聞こえてくる。S Lと動かす人間がいっしょに「頑張るぞ」という気持ちを感じてしまう。S Lという機械には運転する人間の心情さえも乗り移ってしまう不思議な何かがあるように思う。

煙突からチョロチョロとひかえめに吐き出されていた出発前の煙は、石炭が釜に一気に投入されるやにわに勢いを増す。仕事を始める前の

腹ごしらえができ、力がみなぎったことを辺りに誇示しているかのようなのだ。

S Lは私を子どもの頃の気分、思い、感情に連れ戻してくれるどこか特別な力を持っている。

昭和30年代後半は、各家庭にはまだマイカーなどない時代で、もちろんわが家でも同じであった。家の前はまだ馬車が往来し、冬には湯気ある落とし物もよく見かけた時代でもあった。小さい頃の夏の海水浴、冬のスキーなど子どもにとっての家族の大旅行は、もっぱら鉄道が移動手段、S Lがほとんどだったのだろう。

子どもは旅行に出るのが楽しみなのであって、機関車がS Lなのか何なのかは眼中にはなかったに違いない。旅は汽車に乗ってどこかに行けるということで、汽車は煙を吐く黒いカタマリのポッポ、何も特別なものではなく、楽しい旅にいつも普通にある存在だったのかもしれない。

子どもの頃のS L体験は、記憶というより、からだにしみ込んでいたのかもしれない。煙突から出るあの独特の煙の匂い、駐車場で噴出される白い蒸気は不気味な威力を感じさせ怖いとも思った。連結器を通じてガチャンと伝わる重々しい発車時の振動、走行がトップスピードに入ったあたりに「テタパタトン」とリズムカルに響いてくるレールの継ぎ目音、峠などでより強い力が必要になった時によく聞いた「さあもうひと踏ん張り」とでも言っているような長い汽笛音など、からだで覚えていて、楽しい旅の思い出とともに鮮明に蘇ってくる。窓から顔を出し、

石炭カスが目に入り痛かった苦い思い出も含めて。

高校時代の通称「汽車通」では、朝寝坊の私はいつも発車ギリギリに駅に駆け込んだものだった。上りの秋田行SLが待つ向いのホームに行くため駅改札口を通過し渡り階段を駆け上がり、駆け下り急いで乗り込むのだった。時には間に合わず、階段を下りたとたん汽車がガチャンと動き出すことだってあった。当時SLが曳く客車の乗降デッキドアは、手動だったのだろう、開放も可能であったため、既に取り込んでいた友人たちのお陰で何度も駆け込み乗車ができ、遅刻を免れたものだ。いい加減な青春時代だったとこの年になって反省するが、SL時代はそんなダメ人間を寛容さで受け止めてくれていたし、それは生き物的ものが持つ幅だったのかもしれない。厳格さが求められる現代社会ではありえない。SLはゆとりある時代を象徴していたようでもある。

生き物感や人間臭さのあるSLだったが、高度成長期と重なる昭和40年代の後半頃には、スピードと効率化が優先され、急速に姿を消していった。

一定の走行後には石炭と水の補給が必須だし、石炭燃焼で出る煤煙は環境問題になり、運転士だけでなく石炭を燃やす機関士の配置や労働効率、酷暑の労働環境なども大きな問題になったようだ。運転席が機関車後部に位置するなど安全運転上の大きな問題でもあった。何よりも燃料である石炭の確保が難しい時代にもなっていた。丈夫で長持ちの機関車の長所は打ち消され、電車などが普及し進化を遂げる中、SLはお役御免となり次々と姿を消していった。

しかし、SLに長く関わりを持った人、昔を

懐かしむ人たちの愛着はなぜか深く強いものがある。それが今なお、日本各地で様々なイベント等も含め、SLランは続いている。

試乗会でのSL乗車で車窓から大変な数の人々、小さな子どもから老人まで、皆が手を振る沿線光景には胸を打つものがあった。昔を懐かしむ年配の人、SLに何等かの関わりを持った人、寒風山など男鹿の風景と重ねカメラを向ける人、煙を吐き動く不思議なモノに目を丸くする子どもなど様々だ。スマートでも速いわけでもないが、SLが持つ世代を越えて人を引き付ける不思議な魅力とは何なのだろうか。

今の時代、社会はスピード化や効率性を求め、その潮流は速さを増し続けているし、人々も無意識にそれを求めなければ生きにくい時代になってしまった。その恩恵は簡単に言えば、便利でスマートな暮らしなのかもしれない。一方では人間として失いたくないリズムや人間臭さに郷愁を感じ、時にそれに浸り癒されることを求めている時代でもある。

SLは近代的なスマートさやスピード感はないが、人間臭さや生き物としての人への親和性を感じさせてくれる。石炭を燃やし、水を蒸気力に変え動き、補給のためには生き物のように一息をつかなければならない。動かす人間側も重労働だからSLの気持ちも理解でき、SLと人の呼吸がどこかでシンクロナイズしているように思えてくる。

SLには、人間の心情が滲み出るといえる、現れるような乗り物であるところに人はどこか引き付けられているのだろうか。一時代を人と共に懸命に生きたSLは、機械なのだがどこか心が通じあう強さとやさしさを持つ同じ生き物のように感じるのかもしれない。